

小墾田宮推定地第3次の調査

(昭和51年9月～昭和51年10月)

この調査は、家屋新築に伴う事前調査として実施したものである。調査地は、当調査部が昭和45年以来2次にわたり、推定小墾田宮跡として発掘した第2次調査地の西南に隣接する場所である。家屋建設予定地に、東西5.5m、南北6mの発掘区を設定し、一部南に拡張した。発掘面積は46㎡である。調査の結果、7世紀代と推定される溝3、土壌状の落ち込み1を検出した。これらは、いずれも第2次調査で検出した遺構に連続する部分である。(概報4参照)

調査地の層序は、床土下に暗黄褐色粘質土、暗灰褐色粘質土、茶褐色砂質土があり、遺構は茶褐色砂質土上面で検出した。この層の直下には、古墳時代の遺物を含む含礫粗砂層があり、かつては全体に流路であったと考えられる。

溝SD200は、南東から北西に向けて流れる幅3.8m前後、深さ0.6mの素掘りの溝で、今回はその北岸を検出した。溝SD201は、溝SD200の北を平行に走る幅1.2m、深さ0.3mの素掘りの溝であり、今回その西端を確認した。溝SD202は、ほぼ東西に走る幅2m、深さ0.2mの素掘りの溝で、今回の調査地内では南岸が大きく南に広がっている。溝内には人頭大の玉石が散乱して堆積していた。なお、溝SD201とSD202は重複し、前者の方が古い。以上の3条の溝は、いずれも7世紀代の遺構である。土壌状の落ち込みSK222は、前回の調査でその一部を確認していたものである。幅2.0m、深さ0.2m前後の溝状を呈し、発掘区外にのびる。あるいは、溝SD201と本来は1本の溝であった可能性もある。

今回の調査でも、この地域の南半には7～8世紀代の建物は存在せず、数条の溝が西流することを確認した。このことは、県道沿いの南半地区が推定山田道に何らかの関連を有する可能性が前回同様考えられる。しかし、今回も山田道の位置や造営時期について明らかにするような手懸りを得ることはできなかった。